

---

# WORKS

小夜華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WORKS

### 【Nコード】

N7646R

### 【作者名】

小夜華

### 【あらすじ】

「憎悪の事件」という感情移植が噂されてから3年。

ある国では、「歩き女」という最強の戦士が噂されていた。

目的はない。

ただ、歩くだけ・・・

1人歩き続ける彼女の後ろに、

振り返ると仲間はいた。

## 憎悪の事件

今から3年前の話だ。

第18人目国王、ユラジア・ルラサンガラ・フレイシアの治めるフレイシア王国に、憎悪の反乱が起きた。

かつてないほどの強い民の反乱に、歴史あるフレイシア城は焼き払われた。

国民たちの憎悪の先は国王、ユラジア。

その反乱は、1人の兵士の、国中に張り巡らされた半紙にあった。

『家族、友人を探し求めている者たち、兵を挙げよ。

フレイシア城の地下でされている極秘実験とは、人体実験のことだった。

我らの家族、友人を使って、人間の感情移植を進めている。

こんなことが許されてはいけない。

現国王ユラジアに民の怒りを！』

それが春の出来事だったのなら、国民は半紙を書いた兵士を愚か者と笑っただろう。

しかし、実際に国民の中では、夏ごろから行方不明者が続出していた。

加えて家族や友人がいらないというのに、真面目に探しもしない国兵たちに怒りと不満を感じていた。

そしてその兵士の言ったことは、嘘ではなかった。

ユラジアは、城の学者と共に魔法を使った感情移植の実験を、国民を使って試していた・・・

その半紙は、国民の怒りを暴発させるきっかけとなった。

## フレイシア城

「国王！西の門まで火が回っています！」

「・・・っ！出口はないのか！」

国王ユラジアは、自分を囲う炎と今の兵士の報告に恐怖を感じた。

「国王っ！このままでは長年の実験が無駄に・・・！」

弱弱しいその声は、城の学者代表、シマルからだった。

老いた小さな体が震えている。

「くそっ今までの時間が・・・！！！」

歯軋りをして呟いた国王は・・・隣で震えるシマルをみて、

焦りに汗がつつたその顔をにたりと歪ませた。

「なあシマル。」

「・・・はい？」

「お前は、肺の病気であったな。」

「・・・はい・・・炎の煙が・・・」

震えるシマルの声を聞きながら、国王はゆっくり腰の剣を抜いた。

「・・・こっ国王！！！」

「シマル、お前はたいした部下であった。そして気の合う友だった・  
・・・」

「何をっ・・・！」

後ずさるシマルを、ユラジアはゆっくり追い詰める。

「お前は良い働きをした・・・よって、ここで永遠の休息を与えよう。」

剣が大きく振りかぶられる。

「ここで私を殺してなんの得が！」

「なに、死後の世界に少し罪を背負っていけばいいのだ。」

シマルが反論するより先に、振りかぶった剣は勢いよく振り下ろさ

れた。

「国王、報告がっ・・・!」

勢いよく扉を開けた兵士が見たのは・・・

剣を片手に、学者シマルを抱えた国王ユラジアだった。

「学者シマルをこの事件の発端者として罰した。兵を挙げ、全力で国民を広場に集めよ!」

「は、はいっ!!」

大声で叫びながら、兵士は出て行く。

「最後までいい働きをしてくれた・・・シマルよ。」

誰もいない炎が上がる部屋の中で、

誰よりも恐ろしい顔で・・・国王、ユラジアは笑った。

まだ怒りのくすぶる気持ちを抱えて、国民たちは国王最後の弁解を聞いてやろうと広場に集った。

そして大犯罪者、シマルを抱えた国王の話で静まった。

人体実験をしたシマルの愚かさと自分の鈍さを語る国王。

誰も、国王が犯人をシマルに仕立て上げたことも知らず・・・

衝撃と無実の国王を襲った罪悪感の中で、国民は国王の提案を呑んだ。

「シマルの罪を許すわけにはいかない。しかし・・・

城一つ落としてしまったこの国民の憎悪は計り知れない。

どうだ、憎悪の感情だけ、移植してみようと思わないか・・・。」

## 憎悪の事件（後書き）

はい。初の投稿です。

ってかもーここまでだったらわけわかんない話で終わるんだけど。

・・・ごめんね主人公！

次回には登場する・・・あ、ごめんしないかも。

ここまで駄文を読んでくれた皆様、有難うございます。  
次話お楽しみに~~~~

## 静かな酒場

フレイシア王国の外れ、リターナ町。

自然豊かで人々まで穏やかなその町は、今ある噂でざわめいていた。

ある酒場。

「なあリサさん。これ、なんの騒ぎだよ。」

酒場に来るには少し早い、少年と呼べそうな男がカウンターに座っていた。

「それもわからないの？ほんと時代遅れねえ……。」

リサと呼ばれた若い店主は、呆れたように言った。

彼女も酒場の店主と呼ぶにはまだ若いようだが、客の扱いは心得ていた。

「いい加減町に下りてきなよ。あんな森に1人って淋しくない？」

「全然、俺、多分一生あのまま。」

「淋しい男。」

リサはその変わり者から離れ、食器を片付けだした。

「いやいや待て！だからこれなんの騒ぎだよ?!」

男は、自分の後ろに広がる酒場の様子を指差した。

酒場はいつものようににぎやかだったが……今日はにぎやかな訳



が違う。

明るく騒がしく、酔っ払った男たちが踊りだす・・・いつもの風景と違って、今日の酒場は皆で集まって話し合いをしているようだっ  
た。

「この町で知らないって、多分エザルだけよ。」

「だから、何を？」

エザルと呼ばれたその男は、もう1度聞く。

「歩き女って・・・知ってる？」

「歩き女・・・？」

エザルは、リサの言った言葉を繰り返す。

どこかで聞いた。確か・・・

「・・・ああ知ってる！あの旅してる女だな？」

「うん・・・まあそれぐらい知ってないとほんとの時代遅れだから  
ね。」

山奥に住んでるエザルでも、歩き女の噂は聞いていた。

けどその知識も多いわけがなく、その上噂だけで・・・  
大剣を背負った、恐ろしく強い女ってことしか知らなかった。

「その女がね、今、ローザリナに居るらしいの。」

ローザリナはエザルの町、リターナ町の隣町で・・・

「はあああああああつ???!..!」

エザルも、やっと状況を理解した。

「おい、うるせえぞ小僧！！」

後ろから、ある男が怒鳴った。

ガタイのいい男の怒鳴り声には威厳があり、恐怖を感じるものだったが……

エザルも、負けじと言い返した。

「誰か教えてくれてもよかっただろ！俺だけが、無知は！」

「……お？なんだエザルか……。」

「おいおっちゃん！なんだ歩き女って！」

「あーアイツか……。」

大柄な男は、なぜか突然嬉しそうににっと笑った。

「俺もよくしらん。けどな、俺は明日、ソイツを倒す！」

「はあ？」

周りの男たちが、拍手したり叫んだり囃し立てた。  
が、エザルには訳がわからない。

「その女、明日来るのか？」

「噂ではね。」

リサが、そっけなく答えてくれた。

「なんで倒すんだよ？」

「まあコレ見ろ。」

今度はエザルの近くの男が、1枚の神をエザルに突きつけた。  
手配書のような。ゆっくり目を通した。

「・・・おいおじさん。」

「ん？」

「この手配書、印刷ミスがあるぞ。」

「どこだ？」

「懸賞金の○が多すぎる。」

「それミスじゃねえよ馬鹿。」

「・・・嘘だろおおおおお?!1億?!」

エザルの反応に、酒場の人達が笑う。

しかし、エザルは笑い事ではないほどの衝撃を受けていた。

「いやいやいや歩き女って「女」だろ？」

「な?明らかにおかしいだろ？」

最初に怒鳴った大柄な男が言う。

「俺はそれを軍人共のミスだと思ってる!腕っ節なら俺もまけねえ  
!」

確かに、その男の体格から強そうなことは見てとれる。

「じゃーようはアレか?賞金稼ぎか？」

「言い方悪いけど、まあそーゆーことよ。」

エザルの問いに、男は自信満々に答える。

噂がここまで広がるんだから、ミスでもない気がするけどなあ・・・

そうエザルは思ったが口には出さず、

「まあ、頑張れよ。」

とだけ、言っておいた。

ふと酒場の外を見ると、夕日が傾いていた。  
早く帰らないと・・・帰り道が見えなくなる。

「リサさん、俺そろそろ帰るから。」

「はいはい。またね。」

重かった空気が少し軽くなった酒場から、エザルは出て行った。

## 静かな酒場（後書き）

はい、男登場です。（誰だ）

ここで登場しましたよ・・・  
主人公の噂がw

はい、次話お楽しみに~~~~~

## 日常

エザルの家・・・というか小屋は、エザルの父が作ったものだった。今はもういない父だが・・・小屋は、どんな嵐にも耐えられる強度が自慢だった。

「ただいま。」

誰かが居るわけではない。  
ただ、それがエザルの癖だったただけだ。

日が沈みだし、本の文字が読みづらくなった頃・・・  
小屋のドアを叩く、小さな音がした。

- いつものだ。

そう思いながらエザルは本を閉じ、ドアを開ける。

思った通り、そこには小さな女の子が居た。

白い肌と小さな体が、病弱な印象を与える女の子だ。  
実際その通りだった。

「こんにちは！」

元気なちよつとずれた挨拶に、エザルは苦笑いした。

「んー・・・今はこんばんはの時間かな。」

「あれ？ほんとだ。」

きょとんとした女の子の顔を見て、もう一度エザルは微笑む。  
そしてその女の子を小屋に入れた。

「今日の調子は？」

「鼻水はでないけど、咳は出る。」

「そうか・・・じゃあもう大丈夫かな。」

そう言いながら、エザルはレザーのポケットから小さな瓶を出した。

「ほら、コレを温かいお湯かなんかで飲むんだぞ。咳が出なくなったら、シナの病気は治るから。」

「ほんと？」

嬉しそうな顔をしながらその女の子、シナは瓶に入った薬を受け取る。

「エザル先生、ありがとーございました！」

「おう。」

小屋から出て行くシナを見送りながら、「走るなよ」と釘をさす。見えなくなるまで手を振る無邪気な女の子を、エザルは笑顔で見つめていた。

ドアをしめて振り返ると、部屋の中はもう暗くなっていることに気付く。

森の中だけあって、日が沈むのは早いのだ。手探りでランプを付ける。

その途端、急に夜らしくなった。

ああ、今日はなに食べよ・・・

ばーっと、エザルは部屋で考える。

寝るまでにすることなど、もうエザルには分かっていた。  
戸棚にある食べ物で簡単に夕食を食べて、また本を読み、着替えて寝る。

きつと明日の出来事も変わることはない。

しかしエザルは、この生活は決して嫌ではなかった。

エザルが18という若さで1人で生活できるのは、彼に医術が備わっているからだ。

その医学を勉強しながら、患者から少しずつ代金を払う。

貰った代金で、細く長く食いつないでいく・・・

エザルは今の生活から抜け出そうとも、今日の男のように賞金を稼ぐ気も、全くなかったのだ。



## 日常（後書き）

ふうっ！とりあえずは・・・みたいな感じです！

次話お楽しみに～～～

## 非日常

次の日。

空は、鈍く白い光を、雲の隙間から漏らしていた。

「朝からこんなじゃ、今日は絶対雨降るぞ……。」

小さく呟いて、エザルは窓から離れた。

頭の中で思い描いていた今日の予定を、全て帳消しにする。

そして、今日一日小屋にいるということに予定を立て直した。

エザルの予想通り、昼になるころには雨が降り始めた。

「……そう言えば、今日は歩き女が来るんだっけ。」

昨日確かにリサは「明日くる」と言っていたが……。

この雨では、歩き女も動かないかもしれない。

雨脚はどんどん強くなっていく。

時折、雷鳴が聞こえるまでになった。

さすがに森の中に1人で雷鳴の音を聞くのは、少し恐怖を覚えた。

しかし

その10秒後。

エザルは、１人じゃなくなった。

ドオンッ！！！！

「わああああああっ???!!!」

突然の破壊音に、エザルはよく分からない声を出した。

読んでいた本を閉じると同時に振り返ると・・・

自分の小屋のドアが無残に落ち、雨が部屋の床を打っていた。

あー・・・取り付けてめんどくさいのに・・・。

いや、そんなことよりも。

自分の小屋のドアを破壊した無礼な怪力は誰かと見つめた。

そいつは・・・

「・・・は？」

苦しそうに息するその肩は、あまりに華奢すぎる。

立ち込める木のせいで夜のように暗い中に、ギラリと大きな剣が光った。

クリーム色、と呼べそうな髪は、濡れて雫が垂れている。

「いや待て待て待て……えっ?!」

なんで俺の小屋の前に、ずぶ濡れのいかにも怪しい美少女が?!

「……ここ、あんたの家?」

弱弱しいその姿に反して、少女の声は力強かった。

「ああ……うん……そう……?」

自分の小屋なのに、パニックが重なって疑問形になった。

少女は冷静に外れたドアを片手で持ち上げ、壁に立てかけた。  
……あれ? ドアってそんな軽いっけ?

「悪い……蹴り壊した。」

「えっおまつ……蹴った?!」

俺でもそれはできない気がするけど?!

「今急いでいて直せない……悪かった。」

そう言って帰ろうと後ろを向いたその少女の背に……  
大剣と、血をエザルは見つけた。

「待った。」

「・・・あ？」

傷を見た瞬間、エザルは反射的にその細い腕を掴んでいた。

「あんた怪我してるだろ。それと・・・

こんな山奥まで来て急いでるって、誰かから逃げていないか？」

しばらく少女は口をつぐんだが・・・小さな声で、「正解だ」と言  
った。

「俺、一応医者だから。ちょっと見せてみる。そんなんじゃ見過ご  
せない。」

エザルの提案に、少女は話聞いてたか？ってほどの無表情で停止し  
て・・・

また美しい無表情で、一度だけ頷いた。

傷をみれば直したくなる医者の本能のようなものに従って、エザル  
は何も考えずその少女を小屋に入れた。  
これが、エザルの非日常の始まりだった。

非日常（後書き）

なぞの少女登場だよー！

次話楽しみに～～～

## 傷だらけの

一通り、エザルは少女の傷を手当した。

「これ、短刀かなんかの傷だ・・・何された？」

エザルは少女の背中に問う。・・・しかし、少女は無言のままだった。

「なああんたさ、俺からすりゃあ何にも知らない怪しい少女なんだよ。傷の理由くらい教えてくれよ。」

「・・・・・・。」

「・・・・おい。」

エザルはふーっと息を吐く。

「じゃあこうしよう。お前、一応俺の小屋のドア蹴り壊してるんだよ。」

その代償として、傷の理由と名を名乗れ。」

エザルにとっては、ドアが外れるくらいならなんとも思わないが・・

・

こうでもしないと、何も話さない気がしたのだ。

エザルの予想通り、やっと少女は口を開いた。

「・・・・この町に入ったら男共に攻撃された。  
あたしの名前は、ジェライド・クロニウスだ。」

「男共・・・・？」

エザルの脳裏に、昨日の酒場の会話が浮かんだ。  
そして、さっきまで少女が背負っていた大剣に目を向けた。

「……お前、もしかして歩き女か……？」

「……そう呼ぶヤツもいる。」

「……。」

呆気にとられたエザルは、少女をまじまじと観察してしまった。

コイツが歩き女……？

女ってか、まだ全然少女じゃねえか。

こんな細い腕で、あんなでっかい剣を振り回すのか？

一瞬、軍人のミスという男の考えが頭をよぎったが……

いや、コイツ自分で名乗ったし。

それに、動きに無駄がない。戦い慣れてる証拠だ。

それでも噂と目の前の本人とのギャップに驚きつつ、エザルは口を開いた。

「歩き女なら、短刀くらい避けられるんじゃないか？」

「……。」

少女はまた黙った。

仕方なくエザルがもう一度条件をつけようとした時。

「……人は傷つけない。」

そう、少女は小さく呟いたのだった。



願ってもいない歩き女の登場だったが、エザルはだからと言って何もなかった。

・・・むしろ。

「じゃあ町に行けねえじゃん。ここにいていぞ。」

歩き女を、家に置くことにした。

「は？」

今度は歩き女が声をだす。

「はじゃねえよ、どうせ町に居られないだろ？」

「・・・あたしとお前は他人だ。」

「そんなこと言ったら世界中他人だらけになるぞ。・・・とりあえず、お前はまだ返さねえ。」

「・・・？」

ここで始めて、歩き女に見て分かる程度の表情の変化が浮かんた。

「お前、全身に傷がある。・・・ちゃんと医者に診て貰ったのもあるけど、自分で応急処置で済ませたのもあるだろ。」

「・・・なんで分かる？」

歩き女の問いに、エザルは苦笑いした。

「だからいつたろ、俺一応医者なんだよ。」

あ、人ん家だからって遠慮しなくていいぞ。この小屋、俺1人だし。

「

「・・・信用できない。」

「あ？」

「それに悪意がなかったら悪いが・・・あたしは簡単に人を信用できない。」

「それでもいい。」

「え？」

エザルのあっさりしすぎる答えに、歩き女はまた戸惑う。

「信用とか、なくてもいいよ。俺があんとのこと襲ったりしたら殺してくれてもいい。」

「・・・。」

「ああ、俺エザル・クノライな。エザルって呼べよ。」

あんたは何だっけ、ジエライドだっけ？じゃあジエラでいいな。」

「なんで、そこまでする？」

歩き女の問いに、エザルは笑って答えた。

「そりゃあ、まあ医者だからって言うのもあるし、こんな森に女一人追い出せないって男のプライドもあったりする。」

でも・・・一番は、ようは俺は1人で過ごすのが嫌いなんだよ。」

その答えに、歩き女ジエラは、泊まる他になくなったのだ。

## 小屋に二人

夜が更ける。

嵐のように雨が降る小屋の中で、エザルは久しぶりに1人ではない夕食を食べた。

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・・。」

それは無口な客人のせいで、会話が進むことはなかったが。

それでもエザルは、1人ではないという明確な事実が嬉しかった。

エザルの住む森には、よく旅人が迷い込む。

いままでも、そんな旅人を小屋に泊めたりした。

それが、最強と語られる「歩き女」であっても関係ない。

そんなところが、エザルの変人と呼ばれる理由になっているのかもしれない。

「じゃあ俺はここで寝るから、ジェラはベッドで寝ろよ。」

「あたしは寝ない。」

「はあ？」

雨が小降りになって落ち着いてきた森の小屋に、二人分の声がある。

「誰かと同じ空間で寝ると言うことができない。」

「・・・人間不信め。」

ジェラの冷たい言葉に、エザルは悔しそうに呟いた。

ジェラは、エザルの中で野良猫のようなイメージになってきていた。それを手なずける感覚で話しかける・・・

なんて思っていることがばれたら、殺されるかもしれないが。

「それに・・・」

他人の家で家主の居場所を奪ってまで眠れない。」

ジェラの呟いた言葉に、エザルは一瞬呆気にとられた。

そして、ふつとゆるく笑った。

こんなところが、可愛い野良猫なのだ。

結局、

意地でもここに寝る、お前がベットで寝まいが関係ないと言い張って、ジェラが根負けした。

「傷が痛んだりしたら起こせよ。」

おやすみと言うのは何故か照れくさい。  
だから、そう言いながらランプを消した。

「お前が初めてかもしれない。」

「え？」

真っ暗闇の中、ジェラが口を開いた。

「あたしのことをジェラと呼んだの・・・  
あたしが死んで以来だ・・・」

「へ・・・え・・・」

睡魔で回らない頭で答えたエザルは、  
このときのジエラの言葉なんて、深く考えてもいなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7646r/>

---

W A R K S

2011年10月8日22時03分発行